

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

4

2026
No.727



特集

子どもの世界へ

～障害の重い人とのコミュニケーション

障害の重い子ども(人)たちとのコミュニケーションで
大切にしたいこと 細渕富夫

新連載

障害児教育に想像と創造を

児嶋芳郎

- 1 人として 杉田 淳
- 2 【インタビュー】心を寄せて～語る・きく・つながる～ 頭木弘樹
- 4 発達の魅力 長崎純子
- 7 声を紡ぐ 林 典子
- 8 この子と歩む 平松和弘
- 11 進め！推し活道 かきうちのぞみ
- 12 息子と歩く 千葉桜 洋

みんなの ねがい

2026年4月号

No.727

特集 子どもの世界へ ～障害の重い人とのコミュニケーション

- 14 「あなたのことを知りたいの」と思うから、
心の声が見えてくる 小川真奈美
- 16 新聞紙の扉から子どもたちの世界へ 北川さち
- 18 おうくんの心のうちをわかりたい 山下紋奈
- 20 ほしいから育むBさんの暮らし 鯉沼菜々
- 22 障害の重い子ども（人）たちとの
コミュニケーションで大切にしたいこと 細渕富夫

- 25 そのままの君を追いかけて ツルリンゴスター
- 26 「私の人生」～障害者家族の「意見表明権」を考える 田中智子
- 30 私ときょうだい 岡島紀子
- 32 キーワード 障害と医療 佐藤久夫
- 34 障害児教育に想像と創造を 児嶋芳郎
- 38 実践の魅力 小山紗知
- 41 月刊みんなねが編集部 古澤直子
- 42 みんなのひろば
- 44 ニュースナビ 「障害者支援施設の在り方に関する議論のまとめ」 塩見洋介
- 46 僕はあきらめない 本誌編集部
- 47 BOOK／編集後記

裏表紙 おいしいひととき 柴田勇介



デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、株式会社光陽メディア

ちばかおり、永野徹子、日本印刷、橋野桃子、へむかか

表紙のこぼ

桜が咲き始めた春休みの小学校。校庭でサッカー遊びをしていた二人組に声をかけた。仲良さそうに交代でPKごっこをする様子は親友そのものだ。

桜の木の前で肩を寄せ合い立つ二人の少女。彼女たちが何十年か経って大人になったその日、この景色を思い返すことはあるのだろうか。この頃はまだフィルムで撮っていて、その場で写真を渡すことができなかった。デジカメになり、その場で相手のスマホにデータ送信できる現在は少し味気ない気もするが、この美しい瞬間を記録としてすぐに渡せることはすごく貴重だと思う。

ただ、フィルムであれデジタルであれ、そこに在る真実を写したものをAIは越せない。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。

人 として

たんこぶが 運んでくれるもの

NHK報道局「Nらじ」金曜キャスター

杉田 淳さん



おでこにできた、たんこぶの跡がなかなか消えない。ようやく小指の爪の先くらいまで小さくなったが、頑固なかさぶたのようなものが残り、かゆくてかきむしりたくなる。

2ヵ月ほど前、通勤途中に金属製の柱におでこをぶつけた。白杖を持って慎重に歩いているつもりだが、「コーン」といい音がした。白杖ではなく、私のおでこがぶつかった音だ。音にも驚いたが、何より痛かった。「いてえ〜」と思わず声が出たが、なぐさめてくれる人はいない。誰のせいでもない、自分のせいだ。白杖の使い方が悪いのかもしれない。この時、おでこには10円硬貨ほどのたんこぶができた。内出血もあり、触ると鈍い痛みが走った。

ようやく腫れが引き始めた頃、またしても災難に。職場の廊下の曲がり角で、曲がったタイミングがわずかに早かった。90度の尖った角におでこが直撃。同じ場所にお代わりをしてしまった。今度は血が出て、周りの人たちを心配させてしまった。それが、冒頭に書いたたんこぶである。きちんと手当をしたつもりだったが、まだ跡が残っている。

子どもの頃は転んだりぶつかったりして、たんこぶをよく作ったが、この歳になって、普通に歩いているだけでたんこぶが増えるとは思ってもしなかった。そこらじゅうに毘があり、私のおでこを待ち受けている。気を抜き

と簡単にぶつかる。考えごとをしている時ほど危ない。イヤホンでラジオを聴きながら歩くなどもってのほかだ。周囲の音や足裏の感覚に神経を集中させ、少し腰が引けたような歩き方に。それでもたんこぶはできる。以前なら、落ち込んだり、出かけるのが億劫になったりした。おでこの痛みより、メンタルのダメージがこたえた。だが、今は「ネタにしてやろう」と思うようになった。

NHKラジオのニュース番組「Nらじ」で金曜キャスターを務めて、この春で3年目になる。視覚障害のある人がニュース番組でキャスターを担当するのは、NHKではおそらく初めてだ。番組には「杉田デスクの半径2メートル」というコーナーがあり、日常生活で起きたことや感じたことをコラム風に話している。その中でも反響があるのが、「たんこぶ」の話題だ。「おでこに気をつけて」「つばのある帽子をかぶるといいですよ」リスナーから届くメッセージは、どれも温かい。

見えないことは、不便や危険と隣り合わせ。それでもビビってはられない。たんこぶは「今日もよく出かけました」の参加賞のハンコのようなもの。出る杭は打たれるが、たんこぶは人との距離を近づけるきっかけにもなる。そして、こうして記事のネタになって新たな出会いも運んでくれる。

(すぎた まこと)

発達の魅力



第1回

乳児期の発達と保育・療育

シーズン1 発達のみちすじ

京都
児童発達支援事業ぱれっと

長崎純子

私は京都市の療育施設で、施設長・発達相談員として勤務しています。学生の時に子どもの発達の魅力に惹かれ、そこから、乳幼児期～思春期の子どもや保護者への支援に携わっています。私生活では双子男児の母で、発達については素人ですが観察眼に優れた夫と4人暮らしです。療育や子育てで出会った子どもたちのエピソードを、発達の視点から紐解いていきたいと思っています。

発達をとらえる枠組み



「発達」とは、意欲や目的意識など子どもの内側から湧き上がるエネルギーを基盤に、外の世界に働きかけ、それによって生じた外の世界の変化を自分に取り込みながら、自らを創り変えていく過程です。しかし、外の世界との関わりにおいて、それまでのやり方では対応できないことが生じてきます。それが、だだこねや甘えや反抗として現れます。このように、発達とは単にできることが増えていくという直線的で形式的な変化ではなく、葛藤しながら新たな力を形成していく時期と、新たな力を発揮して外の世界と関わっていく時期があり、まるで階段を登るかのようには段階的に変化していき

イラスト へむかか

子どもの世界へ

子どもの世界に入らせてもらう、子どもに尋ねる気持ちで関わる。全国障害者問題研究会(全障研)では、障害の重い子どもたちとのコミュニケーションを考える時、これらの視点を大事にしてきました。

一見すると見過ごしてしまうようなわずかな動き、そっと触れ合った手のひらを通して伝わってくる微細な感覚から、その子の気持ちを受けとめ、その子の気持ちを想像して応えることの意味。「本人はどう思っているんだろう」「さつとさつだろう」「さかもしれない」と、一人ひとりの行動の背後にある「ねがい」を知りたい、わかりたい、理解したい一心で関わり続け、少しずつ子ども理解を深めていくこと。私たちは、日々実践を通して、障害の重い人たちのことを『かんじる、わか

る』目を育ててもらっているとも言えないでしょうか。

いま、本人の意思に関わらず「好ましい」とされる行動への変容を実践者が一方的に求めたり、短期間で成果を出すことが推奨されたりする風潮が、とりわけ教育現場を中心に浸透してきています。

今回の特集では、障害の重さや特性ゆえにコミュニケーションをとることが難しいとされがちな子どもたちの教育実践や、重い障害のある仲間たちを支援、生活や労働をつくる実践、家族の声が綴られます。こうした一つひとつの事実を知り、学び合うことを通して、障害の重い人たちをはじめとして、障害のある人たちとつながり、関わり、育ち合う時に大切にしたいことを、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。

障害の重い人との コミュニケーション



「あなたのことを知りたいの」と 思うから、心の声が見えてくる

滋賀 小川真奈美

すべてが意思表示

33歳になる娘の可奈は、食事、移動、着替え、排泄、意思決定…、生活のすべてに助けが必要ですが、少しでもよければ動きますが、毎日てんかん発作もあり、目を離すことができません。大きな声は出すけれど、言葉で思いを話してくれるわけではありません。歌が大好きで、知っている歌はすぐに、知らない歌は「ん？ どんな歌かな？」と聞き耳を立てた後、リズムに乗って一緒に声を出し、楽しんでくれます。

最近の「モニタリング報告書」には、通所先が変わり、慣れない人や環境にいる可奈の姿を「自分を抱きしめるように小さく丸まって過ごす様子や、職員への抱きつきの際の力が強い：」「よだれもほとんどない」と書かれてありました。可奈のすべてを見て、気持ちをよくみとってくださいているのだと思いました。

食事がいらぬ時、活動をしにくい時、いやな時などは、指をきつく噛み、腕で頭を抱え込んで関わられることを拒否したり、給食の時に母が姿を見せても「今はご飯なの」と、母に見向きもしないのに、少しお腹が膨れてくると母の方を気にしたり、「もうお腹がいっぱい」になると、タオルを噛み噛みします。トイレでは「おしっこが出る顔」をし、出ないときは「今はありません！」と便座に何度座らそうとしても立ち上がってきます。食事の時には、「早くちょうだい！」とテーブルをパンパン叩き、指先にねがいを込めた「ほしい手」を伸ばしてきます。「ねえねえ、アソボ」と、連絡帳を書いている母や職員さんの後ろから思いきり髪や服を引っ張りにきたりします。夜、眠いのに眠れないときは、近所に響き渡るような大声で叫び、ぐずります。

これらもすべて可奈なりの意思表示。今は「微細な表出」で

はなく、激しすぎる表出だったりもしますが、小さい時は、ほっといたらいつまでもほっとかれるままの子どもでした。小さい時の連絡帳には、「○○のとりくみをしましたが、反応がありませんでした」という記録もありました。やはり、見ようと思わなければ見えないということだと思えます。

人格を尊重して関係を紡ぐ

可奈が小さい時から、「吹き出し（心の声）がよく見える」と言って、可奈の思いを言葉にして返してくれる先生や職員さん、母の友だちがたくさんいました。連絡帳が吹き出しの言葉でいっぱいのもありました。

発達相談の先生は、赤ちゃんの可奈にも本当に「いねいに接してください、小さな表出を尊重し、意味づけし、返してください」と。可奈にとっては、はっきりとした意図があったわけではなかったかもしれないけれど、先生が可奈に向けてくれた

障害の重い子ども(人)たちとの コミュニケーションで大切にしたいこと — 3つの実践報告に学ぶ

埼玉大学名誉教授

細渕富夫



障害の重い子ども(人)たちの状態像はさまざまです。特別支援学校には、重い知的障害と肢体不自由を併せもち、さらに継続的かつ濃厚な医療的ケアを必要とする子が増えています。また重い知的障害に加え、いわゆる自傷・他害が激しい子も少なくありません。成人期の生活を支える入所施設・グループホームでもこうした行動障害への対応が課題になっています。ここでは、前掲の3つの実践に触れつつ、障害の重い子ども(人)たちとのコミュニケーションにかかわって私たちが大切にしたいことについて述べたいと思います。

こころの「扉」を探して、 子どもの世界に入り込む — 北川報告

重い知的障害に肢体不自由を併せもつ子どもたちの授業では、まずさまざまな感覚を育てる「感覚(感触)遊び」をすることがあります。北川さちさんは小学部の「つくる・えが

く」授業で、「大切な手を育てる」ために、手にしっかりと触れることやお花紙で遊んで、子どもたちの表情を引き出そうと考えましたが、子どもたちに期待した手の動きは見られず、完成したお花紙の作品もきれいな「立派な大人の作品」になってしまいました。

ここで北川さんは、考えます。子どもたちには「見えない扉」があるのではないか、それを教師が無理やり「力任せに引っ張り出す」のではなく、子どもたちが「おもしろそう」「やってみたい」と思えるところに扉が開くのではないか。そこで新聞紙を貼り合わせてパラバルーンのようにして、歌に合わせて新聞紙の中から出たり入ったりする遊びを取り入れました。ガサゴソした音や感触、破れた新聞紙の隙間から漏れる光、明暗の変化等に子どもたちのこころが動き、新聞紙に手を伸ばし取り除いたり、力強く振り落としたりする手の動きや、にっこりした笑顔が見られるようになったそう

「私の人生」

障害者家族の

「意見表明権」を考える

第1回

「わからなさ」を「声」に



佛教大学

田中智子

たなか ともこ／佛教大学社会福祉学部教授。研究テーマは障害者のいる家族に生じる生活問題、ケアに関する理論的考察。著書に『障害者家族の老いる権利』（全障研出版部）、編著に『障害のある人の暮らす権利』（クリエイツかもがわ）など

5年の時を経て

私が前回、本誌で連載（「高齢期を迎えた障害者と家族」）を持ったのは、2020年のことでした。連載やその後の出版（『障害者家族の老いる権利』全障研出版部、2021年）を通じて、多くの人やテーマとの出会いがありました。私自身にとっても「障害者家族の老い」や「親なき後」という問題が、現在の研究の中心のテーマになりました。

前作『障害者家族の老いる権利』は、当事者・家族共に高齢化していくのに伴い、どのような現実があるのか、その事実を拾い集めて形にしたものでした。言わばご家族の代弁的な役割をさせてもらったように思います。

この間、旧優生保護法をめぐる国家違憲賠償訴訟や、生活保護の基準引き下げをめぐる「いのちのとりで裁判」では、多くの当事者が原告となり、中には勇気を持って名前や顔を公表し、自らの言葉で、自らの生活や思いを語られた方がいたことが社会を大きく動かす力になったと思います。これらの運動から学んだのは、厳しい現実を生きる当事者たちが自らの「人間的復権」をかけて取り組んだ社会運動の意義でした。当事者だから語れること、当事者しか語れないことが社会を動かすということ、そしてそれを聴くための力が社会には求められているということを理解しました。語ることを通して、人間として認められることを要求し、また語ることを通して人間としての尊厳を取り戻していくというまさに「当事者の「声」による社会変革」を目の当たりにし、当事者の

声が成熟した社会をつくっていくための起点となるということの確信を得ました。

障害者家族の語る “わからなさ”

2025年11月17日、全国障害児者の暮らしの場を考える会と厚生労働省の懇談が行われ、それに引き続き記者会見が開かれました。その中で、複数の家族から現在の暮らし、そして現在・将来への不安が語られました。

そのお一人、京都・障害者の暮らしの場を考える会の代表の西原弘明さんからも発言がありました。西原さんは現在70代で、40歳になる知的障害やてんかんの持病がある息子さんと、妻の3人で暮らしています。以下、西原さんの許可も得て、発言内容を記載します。

障害のある息子は、朝起きてから服を着替えたり、ご飯を食べたり、トイレに行くなど、常に見守りや手助け、介助が必要で、一人でいることは難しい状態です。またてんかんの発作が、眠りの浅い朝方に起こることが多いので、私が毎日、隣で寝て、気を付けています。

小さい頃は、いろいろ話してくれていたのに、最近、喋らなくなったことに戸惑っています。たまに私に話しかけてくることもあるのですが、何が言いたいのかわからないと伝えると、残念そうな顔で苦笑いをして去っていきます。本人が考えていることがなかなかわからないというのが、親として一番残念なことです。息子の状態が重度化してきたことで、日常生活での困難が増えていきます。たとえば、トイレに入って汚してしまっても何も言わず

に出てきて、後で確認すると、トイレが大変な状態になっていることがあります。そのため、息子がしたことを一つひとつ確認する必要があります。息子が、できることを増やしていきたいと思いつつも、なかなかそうはいかず、常に見守りをしなければなりません。

このような子どもへの対応も、子どもが小さい頃は何とかやっていましたが、成人してもずっと同じような状態が続くため、時々「いつまでこういうことが続くんだろう」と思うことがあります。正直に言うと、嫌だなと感じることもあります。食事の時に「食べなさい」と言っても食べない時などは、仕事をしていた時は、イライラしてしまい、恥ずかしい話ですが、お茶碗を投げつけてしまったこともあります。自分がカッとなってしまった時には、ものすごい後悔がやってきます。申し訳ないという気持ちになりますし、息子のことを一人の人間としてちゃんと見れていないというか、客観的に対応できない自分を感じます。うまく言葉にできませんが、いつも冷静でいられるように修行しなければならぬと思っています。それでも、やっぱり息子は可愛いんです。

現在、将来の暮らしの場を探しています。グループホームも見学に行ったのですが、夜、一人で複数の利用者をケアするところが多いので、てんかん発作が起こっても把握できないと思います。また、土日は、帰省しなければならぬところも多いので、親が対応できなくなった後に暮らし続けられるのかも不安です。入所施設では一日中施設の中で過ごすことになり、外出が好きな息子はどうなるんだろうと心配です。障害が重度でも、日常生活

障害児教育に 想像と創造を



春 “とことん” 編



立正大学

児嶋芳郎

こじま よしお / 立正大学
社会福祉学部教授。専門は
障害児教育学。編著に『障
害者権利委員会総括所見と
インクルーシブ教育』（全障
研出版部）など



第1回 “とことん” 大切に

私たちが障害のある子どもたちや青年・成人期の人たちの教師や施設職員として仕事をしていくために、欠かすことができないものは何でしょうか？

みなさんはどんなことを思い浮かべますか？ 私は、「目の前に障害のある人たちがいなければ、私たちの仕事は成り立たない」ということを、まず考えます。これは、決して障害のある人たちが、仕事の材料や道具のように考えているということではありません。私たちが実践を創造していくにあたって、障害のある人たちはパートナーやチームの一員であり、実践者だけでは実践は創ることができないものだということです。

パートナーやチームの一員であれば、その人たちのことを実践者は、とことん理解し、また逆に障害のある人たちにも実践者のことを理解してもらわなければなりません。そして、お互いをとことん大切にしかっていかねばならないのではないのでしょうか。

私たちの仕事は、障害のある人たちの尊厳を守り、すべての人権の主体者として尊重することが根本になければなりません。しかし、この当たり前のことを日々の実践において体現していくこと

イラスト ちばかおり

が、実は一番むずかしいことなのかもしれないですね…。



わかってないのはいっちゃん

「△月×日はなんよ〜び」「今日の給食はな〜に」。子どもたちが教師にこういって尋ねてくる場面がよくあります。最初は「水曜日だよ」「カレーライスだね」と答えていたものの、これが何度も続いてくると、「もうわかってるでしょう」「何度も同じことを聞かない」となり、しまいは答えないようになる、なんてことはないでしょうか。

自閉スペクトラム症の子どもは、その障害ゆえに「見通し」がもちづらく、視覚的な支援が必要だと、カレンダーや給食の献立表を示して「ほら、△月×日は水曜日でしょう」「カレーライスと書いてあるよ」と答える。子どもが次に来た時には、カレンダーなどを指さし、「確認してきな」。また、何度も同じことを聞きに来るのは、教師の気を引こうとする「不適切」な行動で、それに「反応」すると、よりその行動が増えていく。だから反応しないようにしよう（負の強化因子を排除する）。最近では、こういったことを聞くことが多くなってきました。

しかし、それは子どもたちを、とことん、大切にしている指導や対応なのでしようか。教師に語りかけてくる子どもたちに答え返さないで「無視する」ことが、本当に子どものためになるのでしょうか。

子どもたちは、教師のことを困らせようとしているわけではありません。また、それは「見通し」がもてないという理由からだけの行動なのでしようか。「見通し」がもてないだけならば、なぜ何度も聞いてくるのでしょうか。その背景にある子ども自身の理由を探ることが大切だと思います。

「わかってるでしょ」と子どもに話している教師の側が、実は子ども自身の行動の背景にある思いをしっかりと想像し、「わかるう」としていかないのかもしれない。仮に子どもがあれこれ聞いてくる行動をしなくなったとしても、それは子どもが納得して自身で行動を変えたのではないでしょう。伝えたい思いを懸命にぶつけているのに、それを受けとめてくれない教師に対して、子どもは、信頼を寄せることができないからです。

一時的な行動は変わったとしても、子どもに「この人に言ってもどうせわかっ

てくれない。もう言うのはあきらめよう」という思いや、自分のことを大切にしてもらえていないという思いを抱かせているとすれば、実践を創造していく土台そのものが崩れてしまうのではないのでしょうか。



思いが伝わってほつ

「●●車庫行きの電車は、乗ってはいけません」。ある子どもが、何人もの大人に、こう尋ね歩いていました。どの人も優しい声で、「そうだね、●●車庫行きの電車は回送だから、乗つたらいけない」と答えます。しかし、その答えを聞くと、その子はブイッと方向を変え、次の人の所へ行ってしまう。

そうこうしていると、彼は私の所にもやって来ました。そして「●●車庫行きの電車は乗つたらいけない」。私が「回送だから、乗つたら車庫に行っちゃうね」と答えると、なぜか残念そうな表情を浮かべ、行ってしまいました。

彼の姿を気にかけていると、ある人に対して同じように話しかけました。するとその人は、「なんだ、●●車庫行きに乗りたかったのか。1回乗ってみたいよな」と返しました。即座に彼は「うん！」



ニュースナビ

2026年4月号

News Navi

厚労省「障害者の地域生活支援も踏まえた障害者支援施設の在り方に関するこれまでの議論のまとめ」をどう読み解くか

事態の経過

厚労省は、2025年5月から9月にかけて、「障害者の地域生活支援も踏まえた障害者支援施設の在り方に関する検討会」を都合4回開催して、「議論のまとめ」を9月24日に公表しました。この検討会の設置は、NHKが行った入所施設・グループホームの全国調査によって、少なくとも2万2千人以上の人たちが入所待機者となっていることがわかり、2024年7月にそのことが報じられたことをうけて、武見厚生労働大臣（当時）が「各自治体での待機者の定義や把握状況などについてしっかり調査を進めていく」と表明したことに端を発したものです。

厚生労働省は、すでに稼働させていた省内の研究会「障害者の地域支援も踏まえた障害者支援施設の在り方に係る調査研究」の中に、地方自治体の施設入所待機者の把握状況についての調査を加える形で予備調査を行いました。この研究チームの事務局は、高市内閣発足により新設された「日本成長戦略会議」にも委員を送っている「PwCコンサルティング合同会社」が担いました。2025年3月11日に開催された最終の研究会でとりまとめられた「調査報告書」は、厚生労働省ではなくコンサル会社のホームページに掲載されています。

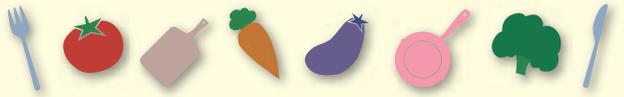
厚生労働省の検討会は、こうした準備作業の

上に立っておこなわれ、そのとりまとめは、①障害者支援施設の現状、②障害者支援施設に求められる姿、③今後の障害福祉計画の目標の基本的方向性、などの章から構成されています。

「議論のまとめ」が示した結論

まとめでは施設入所待機者は、「必ずしも障害者支援施設でなければならないというニーズではなく、グループホームの利用や一人暮らし等も含めた居住者支援全般にかかるニーズ」と規定した上で、本人ではなく家族による入所希望の扱いや複数施設への申込者の算定方法、緊急性の把握などについて自治体間でばらつきがあることや、半数の自治体が待機者を把握していない状況にあることなどから、「どのような自治体への支援が可能なのかを念頭に置きつつ、実態把握をしている自治体の事例の共有その他にとりうる対応等について、引き続き検討していく必要がある」と結論づけました。

合わせて、これまで「障害者の希望に応じた地域での暮らしを選択できるよう地域移行を進めてきた中で、現状では地域移行に取り組んでいないなど、求められる役割・機能を果たせていない施設も一定数あることを踏まえれば、…引き続き、地域移行者数や施設入所者数の削減の目標値を設定することが必要である」とも指摘しています。



大切にしているもの

大阪 夢工房くるみ 柴田勇介

くるみの森では、クッキーやチュイル、パウンドケーキなどの焼菓子を中心に製造しています。おいしくて安全な焼菓子を作ることが私たちの目標なので、材料は生産地や生産方法をしっかり確認し、手洗いや殺菌は利用者さんも大事だと思ってもらえるように研修を重ねています。そうして製造した焼菓子が誰かに笑顔で食べてもらえることがうれしく、利用者さんは話されています。

仕事に誇りをもって取り組んでもらうことが、利用者さんの生きがいや社会での役割につながると思います。これからは自信をもって勧めることができるよう焼菓子の製造に取り組んでいきたいです。

